王陵の地域史研究

～飛鳥地域の後・終末期古墳測量調査報告Ⅸ～

２０１５

例　言

1、この調査は「飛鳥地域の地域史研究」の一環として行った測量調査である。主な調査地は以下の通りである。

・塚本古墳　奈良県高市郡明日香村大字稲渕159他

2、測量調査に際しては、古墳の土地所有者の各位にご理解あるご協力をいただき、順調に進行、完了したことに深謝の意を表したい。また調査・資料収集等に際してご尽力を賜った関係各位に感謝の意を表します。(五十音順・敬称略)

相原嘉之、東　潮、猪熊兼勝、上田俊和、上田裕人、小倉長則、小倉幸夫、河上邦彦、辰巳月美、徳田誠志、寺西定則、長谷川透、宮本昌彦、米田文孝

3、遺跡分布図は、国土地理院発行の二万五千分の一「畝傍」と明日香村都市計画図（1：2500）を使用した。

4、本書の執筆は西光慎治、辰巳俊輔があたった。

5、墳丘測量図の製図は西光慎治、辰巳俊輔が行った。

6、関係書類・図面等は西光慎治が保管している。

7、本書の編集は西光慎治が担当した。

目　次

例言　目次……(38)
第1章　調査に至る経緯と目的……(39)
第2章　飛鳥地域の測量調査……(40)
　第1節　地理的・歴史的環境……(40)
　第2節　塚本古墳測量調査報告……(45)
　　1．はじめに……(45)
　　2．測量調査報告……(45)
　　3．表採遺物……(45)
　第3節　檜隈坂合陵・檜隈墓「兆域」石標について……(50)
　　1．はじめに……(50)
　　2．「兆域」石標について……(50)
　　3．まとめ……(50)
　第4節　狐塚踏査報告……(53)
　　1．はじめに……(53)
　　2．踏査報告……(53)
　　3．表採遺物……(53)
第3章　総括……(55)

第１章　調査に至る経緯と目的

飛鳥地域には多くの後・終末期古墳が分布していることは周知のとおりである。しかし未だ資料化されていないものも少なくない。こういった中、1982（昭和57）年以降、奈良県橿原考古学研究所や関西大学文学部考古学研究室等によってキトラ古墳をはじめ牽牛子塚古墳や岩屋山古墳、塚本古墳などの測量調査が実施されている。こういった測量調査は基礎資料の資料化として地域史研究にとって重要な役割を担っていることはいうまでもない。

今回の調査は筆者が飛鳥と周辺地域の地域史像の解明に向けて取り組んでいる「飛鳥地域の地域史研究」の一環として企画し、土地所有者のご厚意・ご協力のもと測量調査・踏査を実施したものである。調査は通常勤務に支障のないことを期したため、休日や年末・年始を利用した断続的な調査となった。調査期間は平成26（2014）年12月～平成27（2015）年１月にかけてのべ６日間行った。

【調査体制】

調査体制は以下の通りである。

	塚本古墳
担当者	西光慎治・辰巳俊輔
調査員	上田裕人（関西大学文学部考古学研究室）

【見学会の開催】

参加者を中心に測量調査の深化と比較検討を行うため、見学会を実施した。見学した古墳は以下の通りである。

赤坂天王山古墳、岩屋山古墳、打上古墳、カヅマヤマ古墳、カンジョ古墳、艸墓古墳、権現堂古墳、小谷古墳、菖蒲池古墳、新宮山古墳、谷首古墳、谷脇古墳、束明神古墳、塚本古墳、花山西塚古墳、花山東塚古墳、真弓鑵子塚古墳、マルコ山古墳、都塚古墳、文殊院西古墳、文殊院東古墳

第２章　飛鳥地域の測量調査

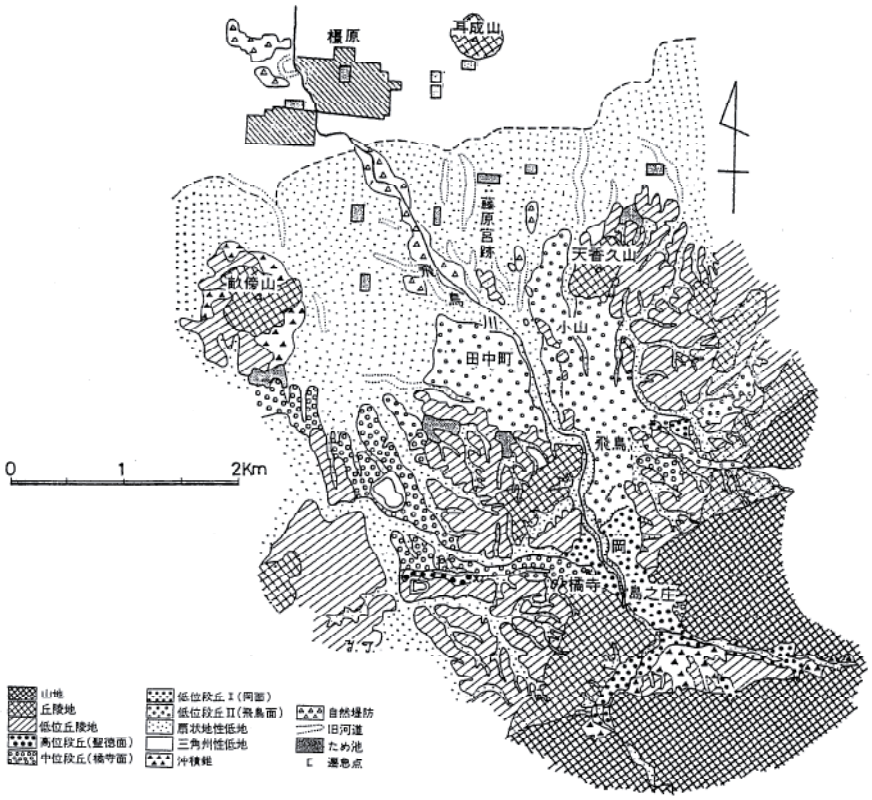
第１節　地理的・歴史的環境

【地理的環境】

明日香村は奈良盆地の南端に位置しており、背後には龍門山地が連なっている。龍門山地は奈良盆地と吉野山地を二分する位置にあり、中央構造線にそって吉野川が西流している。吉野川は下流域の和歌山県に入ると紀ノ川と称されている。龍門山地は奈良県のほぼ中央を東西に伸びており、奈良盆地と吉野山地とを繋ぐ幹線道は現在では芦原峠（芦原トンネル）となっているが古代では下ツ道から続く、巨勢路（紀路）や宮滝へと続く芋ヶ峠がありこれらの幹線道は村内を貫いており交通の要衝であったことが窺える。龍門山地は龍門岳（904m）を主峰にして、北に熊ヶ岳（904m）、経ヶ塚山（889m）、音羽山（801ｍ）が連なり、東には多武峰の御破裂山（619m）を、西に高取山（583m）を配している。明日香村は御破裂山、高取山から派生した樹枝状に伸びた低位丘陵に抱かれた地域に位置している。

明日香村内の主要河川は南東から村内を縦断するように一級河川の飛鳥川が、西には高取川があり、それぞれ北流している。飛鳥川は多武峰と高取山から連なる芋ヶ峠、竜在峠付近に源を発している。途中、冬野川や唯称寺川と合流し、甘樫丘の東方で流れを北西に屈曲させ北流を続けていく。一方、高取川には桧前盆地を流れる桧前川が注ぎ込んでいる。

桧前盆地は標高100mの等高線に囲まれた１㎞四方の小氾濫原の支谷に形成されており、西側には幹線道の下ツ道が接している。高取川の西方にある貝吹山から伸びる尾根筋の裾部には高市郡と葛城郡との郡界となる曽我川が北流しており、大字寺崎付近で越峠付近から伸びる前川が曽我川に流れ込んでいる。



第１図　明日香村周辺地質図

【歴史的環境】

〈縄文時代〉

飛鳥地域は飛鳥川と高取川を中心に肥沃な段丘面が形成され、ここを基軸として縄文時代から人類の生活の営みを知ることができる。まず、高取川流域では縄文時代草創期の有茎尖頭器が出土した桧前脇田遺跡をはじめとして、飛鳥川流域では飛鳥池遺跡で草創期の有茎尖頭器と木の葉形尖頭器が出土している。中期～晩期にかけては稲淵ムガンダ遺跡・坂田寺下層遺跡、・島庄遺跡・飛鳥京下層遺跡・大官大寺下層遺跡等が存在し、集石遺構や竪穴式住居、土器棺などが検出されている。

〈弥生時代〉

弥生時代になると飛鳥川流域では飛鳥京下層遺跡（岡遺跡）（前期～後期）・山田道遺跡（中期）があり、島庄遺跡では中期の多角形プランを有した竪穴住居が検出されている。冬野川の上流域でV様式系甕が出土したとされており、周辺に集落が存在していた可能性がある。高取川流域では御園アリイ遺跡（中期）で土坑などが検出されている。そして、飛鳥時代前夜となる古墳時代がはじまる。

〈古墳時代〉

飛鳥地域の古墳時代については現段階ではまとまった遺跡は確認されていない。そういった中にあって坂田寺下層遺跡や島庄遺跡、飛鳥京下層遺跡、水落遺跡、大官大寺下層遺跡等で6世紀前半～後半にかけての竪穴住居等が数棟検出されている。また東橘遺跡や島庄遺跡、川原寺下層遺跡、甘樫丘東麓遺跡、古宮遺跡、上ノ井手遺跡、山田道下層遺跡、阿部山遺跡群等でも竪穴住居や古式土師器、韓式系土器、滑石製玉類や土坑等が検出されている。高取川流域では御園アリイ遺跡や桧前タバタ遺跡で竪穴式住居や古式土師器が検出されている。飛鳥川流域では右岸の段丘上を中心に縄文時代から人々が生活を営んできたが、6世紀末に飛鳥真神原に飛鳥寺が建立されて以降、寺院や宮殿が立ち並ぶようになる。飛鳥京周辺でも酒船石遺跡や雷丘、甘樫丘等で形象埴輪や普通円筒が出土しており、宮殿造営に伴って削平、消滅した古墳が多く存在していたことがわかる。さらに飛鳥川の支流、冬野川流域には横穴式石室を主体とした約200基を超える細川谷古墳群が展開している。群内には緑泥石片岩の箱式石棺を内蔵した堂ノ前塚古墳や戒成組田古墳、穹窿状横穴式石室を有しミニチュア炊飯具等が出土した上5号墳、石材の一部に切石を用いた打上古墳など特徴のある古墳が多く分布している。また冬野川下流域には一辺約50mの方墳の石舞台古墳が存在し、対岸には都塚古墳や塚本古墳など家形石棺を有した6世紀後半から7世紀初頭にかけての古墳が築かれている。その他、寺川の支流、中の川の上流部には八釣・東山古墳群が展開しており、多くの馬具やガラス玉等が出土している。また曽我川の支流、前川の上流部では6世紀中頃に造営された真弓鑵子塚古墳がある。真弓鑵子塚古墳は玄室の北側に奥室を有し、玄室床面積は石舞台古墳をしのぶ規模であり、石室内からはミニチュア炊飯具をはじめ銀象嵌刀装具、玉類、金銅製馬具、そして獣面を模った獣面飾金具などが出土している。前川の右岸ではミニチュア炊飯具等が出土した与楽古墳群など貝吹山（標高210m）の南側斜面には数百基の古墳が展開し、左岸にあるスズミ1号墳からもミニチュア炊飯具が出土するなど、前川を中心とした周辺の古墳群は東漢氏の奥津城と考えられている。また高取川流域では方格規矩鏡や四獣形鏡等が出土した向山1号墳やミニチュア炊

1.牽牛子塚古墳　2.越塚御門古墳　3.真弓鑓子塚古墳　4.小谷古墳　5.益田岩船　6.沼山古墳　7.与楽古墳群　8.岩屋山古墳　9.スズミ１号墳
10.スズミ２号墳　11.カヅマヤマ古墳　12.真弓ミヅツ古墳　13.真弓テラノマエ古墳　14.マルコ山古墳　15.佐田遺跡群　16.東明神古墳　17.佐田２号墳
18.佐田１号墳　19.出口山古墳　20.森カシタニ遺跡　21.森カシタニ塚古墳　22.向山１号墳　23.薩摩遺跡　24.松山呑谷古墳　25.清水谷古墳
26.ホラント遺跡　27.阿部山遺跡群　28.稲村山古墳　29.観覚寺遺跡　30.キトラ古墳　31.阿部山廃寺　32.呉原寺跡　33.檜隈門田遺跡　34.檜前大田遺跡
35.檜隈寺跡　36.坂ノ山古墳群　37.桧前上山遺跡　38.御園チシアイ遺跡・御園アリイ遺跡　39.塚穴古墳　40.高松塚古墳　41.火振山古墳　42.中尾山古墳
43.平田キタガワ古墳　44.梅山古墳　45.カナヅカ古墳　46.鬼の俎・雪隠古墳　47.野口王墓古墳　48.川原下ノ茶屋遺跡　49.亀石　50.西橘遺跡　51.定林寺跡
52.菖蒲池古墳　53.五条野宮ヶ原１号墳・２号墳　54.五条野向イ古墳　55.五条野城脇古墳　56.五条野内垣内古墳　57.植山古墳　58.五条野丸山古墳
59.軽寺跡　60.石川精舎　61.橿原遺跡　62.田中廃寺　63.和田廃寺　64.雷丘北方遺跡　65.大官大寺跡　66.カセヤ塚古墳　67.庚申塚古墳　68.山田寺跡
69.上の井手遺跡　70.奥山久米寺跡　71.奥山リウゲ遺跡　72.雷丘東方遺跡　73.雷丘　74.豊浦寺跡　75.石神遺跡　76.飛鳥水落遺跡　77.飛鳥寺西方遺跡
78.飛鳥寺跡　79.飛鳥東垣内遺跡　80.竹田遺跡　81.小原シウロ遺跡　82.八釣・東山古墳群　83.東山マキド遺跡　84.金鳥塚古墳　85.飛鳥池工房遺跡
86.酒船石遺跡　87.飛鳥京跡　88.飛鳥京跡苑池　89.甘樫丘東麓遺跡　90.川原寺裏山遺跡　91.川原寺跡　92.橘寺跡　93.東橘遺跡　94.島庄遺跡
95.石舞台１～４号墳　96.石舞台古墳　97.馬場頭古墳群　98.打上古墳　99.都塚古墳　100.戒成組田古墳　101.坂田寺跡　102.飛鳥稲淵宮殿跡
103.塚本古墳　104.朝風廃寺　105.稲淵ムカンダ遺跡　106.狐塚

第２図　飛鳥地域周辺遺跡分布図

飯具や釵子が出土した坂ノ山古墳群や阿部山遺跡群、銀製釧などが出土した稲村山古墳などが点在している。隣接してある観覚寺遺跡や清水谷遺跡、薩摩遺跡からは大壁建物やオンドル遺構、方形池が検出されるなど檜隈地域周辺には多くの渡来系氏族が蕃居していたことが窺える。

〈飛鳥時代〉

飛鳥時代の７世紀に入ると高取川左岸（真弓丘陵）から右岸（桧前盆地）にかけて多くの終末期古墳が築かれるようになる。真弓から越智丘陵では精美な横穴式石室を有した岩屋山古墳や凝灰岩の巨石を刳り貫いた牽牛子塚古墳や石英閃緑岩の刳り貫き式横口式石槨を有した越塚御門古墳などが存在している。さらに南方には多角形を呈したマルコ山古墳や凝灰岩の切石を積み上げた束明神古墳、蔵骨器を内蔵したとされる出口山古墳などが点在している。また結晶片岩の磚積石室で棺台を有したカヅマヤマ古墳や真弓テラノマエ古墳が点在している。真弓テラノマエ古墳では棺台と玄室床面に平瓦が使用されている。桧前盆地になると梅山古墳からカナヅカ古墳、鬼の俎・雪隠古墳、野口王墓古墳が東西に並んで築かれており、南方には八角墳で火葬墓の中尾山古墳や極彩色の壁画で有名な高松塚古墳が存在している。北方の甘樫丘南麓では榛原石を段状に積み上げた小山田遺跡が位置し、さらに高松塚古墳から1.5㎞南には四神図や天文図、十二支像が確認されたキトラ古墳がある。

飛鳥盆地では蘇我氏の氏寺の飛鳥寺をはじめ、豊浦寺や山田寺、奥山久米寺、坂田寺、定林寺などの多くの古代寺院が築かれる。国家寺院としては百済大寺（吉備池廃寺）が造営され、その法灯は高市大寺、大官大寺、奈良大安寺へと繋がれていく。その他、斉明天皇の菩提を弔うために川原宮の跡地に川原寺が造営される。また宮殿も乙巳の変の舞台となった飛鳥板蓋宮や斉明天皇の後飛鳥岡本宮、天武天皇の飛鳥浄御原宮や苑池などが造営される。これらの宮殿に近接して酒船石遺跡や飛鳥池遺跡がある。酒船石遺跡では酒船石を中心に丘陵を藤原層群豊田累層の凝灰岩質細粒砂岩を使用した石垣が約700ｍにわたって巡っており、また丘陵の北側裾部からは亀形石造物を中心とした導水施設と石敷き広場が検出されるなど二槻宮との関連が注目されている。また石上山石を運んだ狂心渠と考えられる幅約10ｍの運河跡が飛鳥東垣内遺跡で検出されている。この運河の上流に約１㎞にわたって続いており、上流部には飛鳥池工房遺跡が存在する。飛鳥池工房遺跡は７～８世紀にかけての官営工房で炉跡や石組み溝、掘立柱建物の遺構の他、金属・ガラス玉・鋳型・大量の木簡、また鋳造貨幣では和同開珎より遡るとされる「富本銭」が出土している。この他、飛鳥東方の丘陵地には小原シウロ遺跡や東山マキド遺跡、竹田遺跡があり、７世紀代の掘立柱建物群が検出されている。また橘寺西方にある西橘遺跡では７世紀後半～末にかけての庇付掘立柱建物や大量の木簡が出土している。飛鳥寺西方遺跡では石敷をはじめ掘立柱建物が検出されている。宮殿域の中心部から離れた桧前盆地では東漢氏の氏寺とされる檜隈寺や呉原寺等の寺院が建立され、周辺の檜前大田遺跡では大壁状遺構や７世紀代の掘立柱建物群が検出されている。

〈奈良時代以降〉

奈良時代以降の飛鳥地域の様相については西暦694年、政治の舞台は飛鳥京から藤原京へ、更に藤原京から平城京に移るようになると飛鳥地域では顕著な遺構はあまり認められなくなる。一方、雷丘東方遺跡では井戸枠の年輪年代から淳仁朝の「小治田宮」が奈良から平安時代にかけて存続していたことも明らかとなっている。阿部山遺跡群では11～13世紀代にかけての白

磁椀を使用した火葬墓や一辺約４ｍの墳丘をもつ木棺墓が検出されており、棺内から龍泉窯系青磁椀等が出土している。中世以降になると橘寺や川原寺、飛鳥寺など飛鳥の景観を形成していた堂塔伽藍が落雷等により相次いで焼失し、飛鳥の風景が大きく変貌していく。南北朝期に越智氏が越智城を構え、飛鳥周辺にも貝吹山城や佐田城が築かれるようになる。また越智氏は高取山に逃げ城的な存在の高取城を築き、その後本多氏、植村氏によって改修を重ねながら高取藩の居城として幕末まで存続していく。高取城の石垣の一部には古墳の石材を転用しており、この時期飛鳥地域の後・終末期古墳が破壊されていたことが推測できる。飛鳥盆地には砦的性格をもつ奥山城や飛鳥城、雷城や岡城、そして野口城や貝吹城、観覚寺城が築かれるようになる。近世になると伊勢や吉野などの寺社を往来する旅人の案内として分岐点に道標が設置される。西国七番札所である岡寺（龍蓋寺）の門前町が賑わいをみせ、本居宣長も岡の薬屋で一夜を過ごしており、今日もなお古い町並みは往時を偲ばせてくれる。

第２節　塚本古墳測量調査報告

１．はじめに

塚本古墳は奈良県高市郡明日香村大字稲渕に所在する終末期古墳である。1893（明治23）年に著された野淵龍潜の『大和國古墳墓取調書』には「玄室羨道ノ天井石ハ露出セリ内ニ入リ之ヲ検スルニ其構造古制ニ可ヘリ然レドモ室内ノ大半ハ土砂ニ埋没シアルヲ以テ充分ノ調査ヲ為スヲ得ス大和志ニ當大字ニ荒墳アルコトハ明記シアレドモ何人ノ塚ナルカヲ詳ニセス且ツ他ニ口碑傳説等ノ考証ニ資スベキモノナシ」と記されている。1921（大正10）年に刊行された『奈良県史蹟勝地調査会報告書』第８輯には「ツカモト塚」「方形」「田」「東西参間南北二間」と記されている。1923（大正12）年に刊行された『高市郡古墳誌』には「大字祝戸から稲淵に至る途中右方二町許行くと、水田の畦畔の所にある。既に発掘された古墳であって、現今は玄室の東壁と思はれる一部と、天井の一部らしい石材だけ存在して居る。里人の話によると二三十年前には完全なる石槨をなして有ったが、何時の間にか破壊せられ、七八年前に里道改修の際石材を割って使用したとの事である。現状から推量すると、この古墳の羨道は南に開けてあって、羨道の入口から玄室の奥壁まで十九尺、幅約十尺くらいの円墳であったらしい。」と記されている。

1982（昭和57）年に刊行された奈良県立橿原考古学研究所の『飛鳥・磐余地域の後・終末期古墳と寺院跡』では、関西大学文学部考古学研究室による測量調査の成果が報告された。その後、発掘調査が実施され、一辺39×40mの壇を有する方墳であることが明らかとなり、同時に石室や排水溝に関する新たな知見も報告されている。石室は全長約12.5mの横穴式石室で、石室内には凝灰岩の家形石棺が安置され、羨道の排水溝以前の遺構として根石を有する柱穴群が検出されている。羨道幅と合致する部位に一定の間隔で掘削されていることなどから石室の構築に伴う木組み用柱穴と指摘されている。

２．測量調査報告

塚本古墳は竜門山系より北西方向に伸びる尾根から一部南東方向へ舌状に派生する尾根上に位置している。周辺には石舞台古墳や都塚古墳といった大型方墳や横穴式石室墳を主体とする細川谷古墳群が点在する。東方向の飛鳥川左岸には飛鳥時代の石敷がひろがっており、宮殿との関わりが指摘されている。

墳丘は発掘調査では堀切の一部や墳丘の裾部などが検出されているが現況では水田等に伴う開墾や削平等による改変により、地表面でその痕跡を確認することができない。

石室については切石の両袖式の横穴式石室で発掘調査後、床面より約１ｍまで埋め戻しが行われており、現在は奥壁及び左側壁の二段目まで確認することができる。石室北側の標高176.500mからは急激な立ち上がりが認められることから、終末期古墳特有の切断面の存在を考えることができる。現在、石室周辺は水田化により棚田状を呈しており、墳丘の形状を確認することは困難である。

３．表採遺物

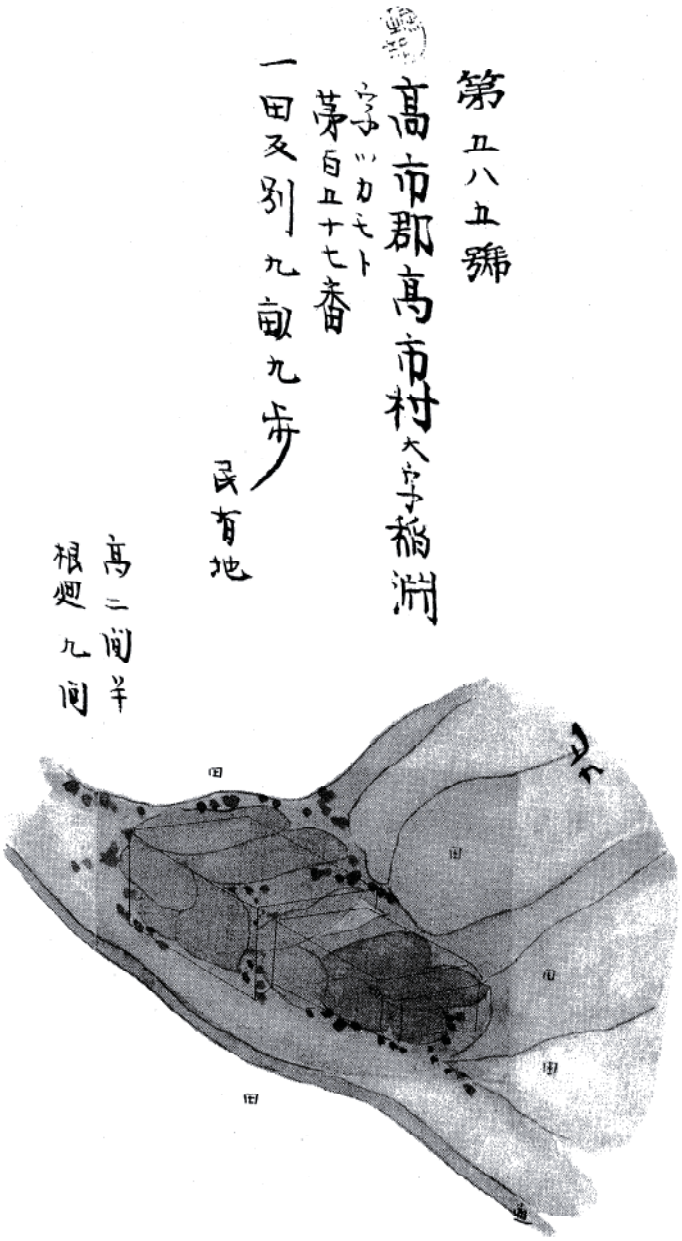
今回の測量調査では表採遺物等は確認できなかった。

【引用・参考文献】

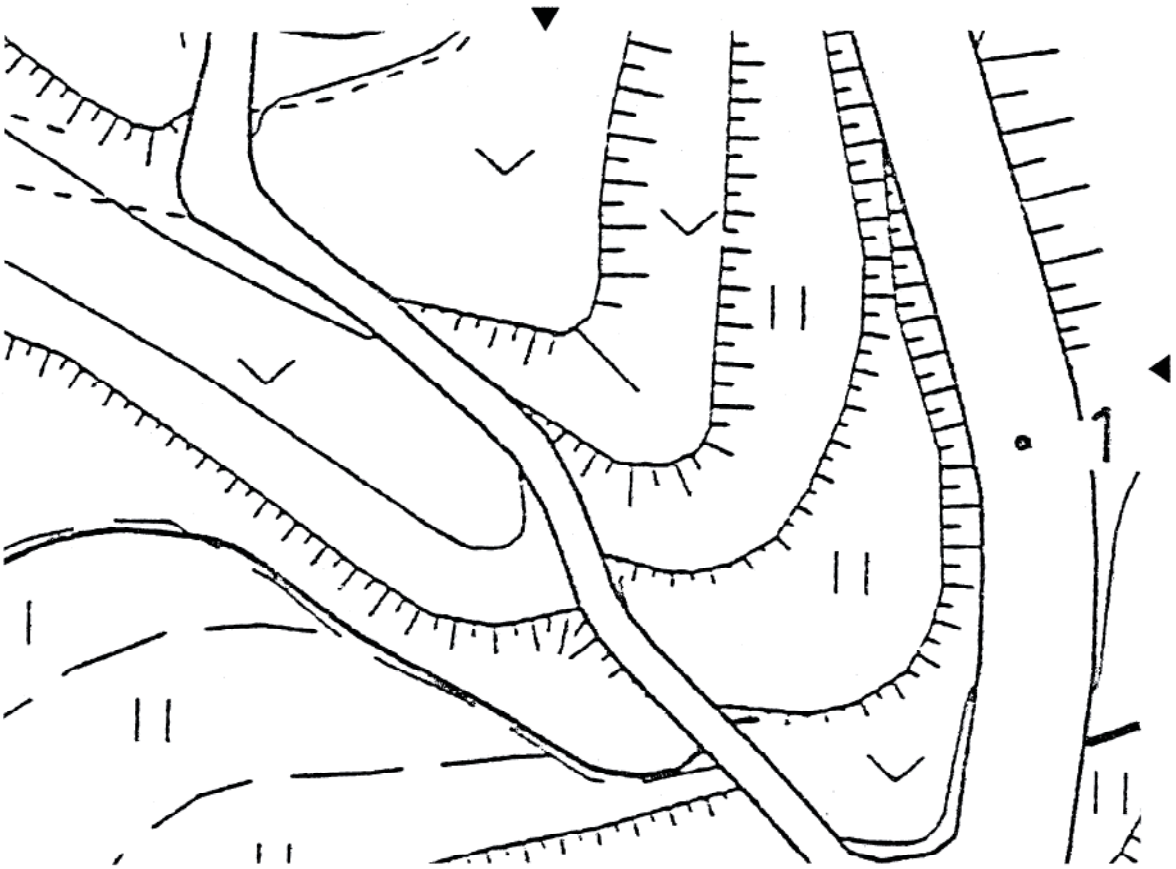
野淵龍潜1893『大和國古墳墓取調書』

東　　潮1983「明日香村　塚本古墳　発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1982年度（第二分冊）』
　　奈良県立橿原考古学研究所

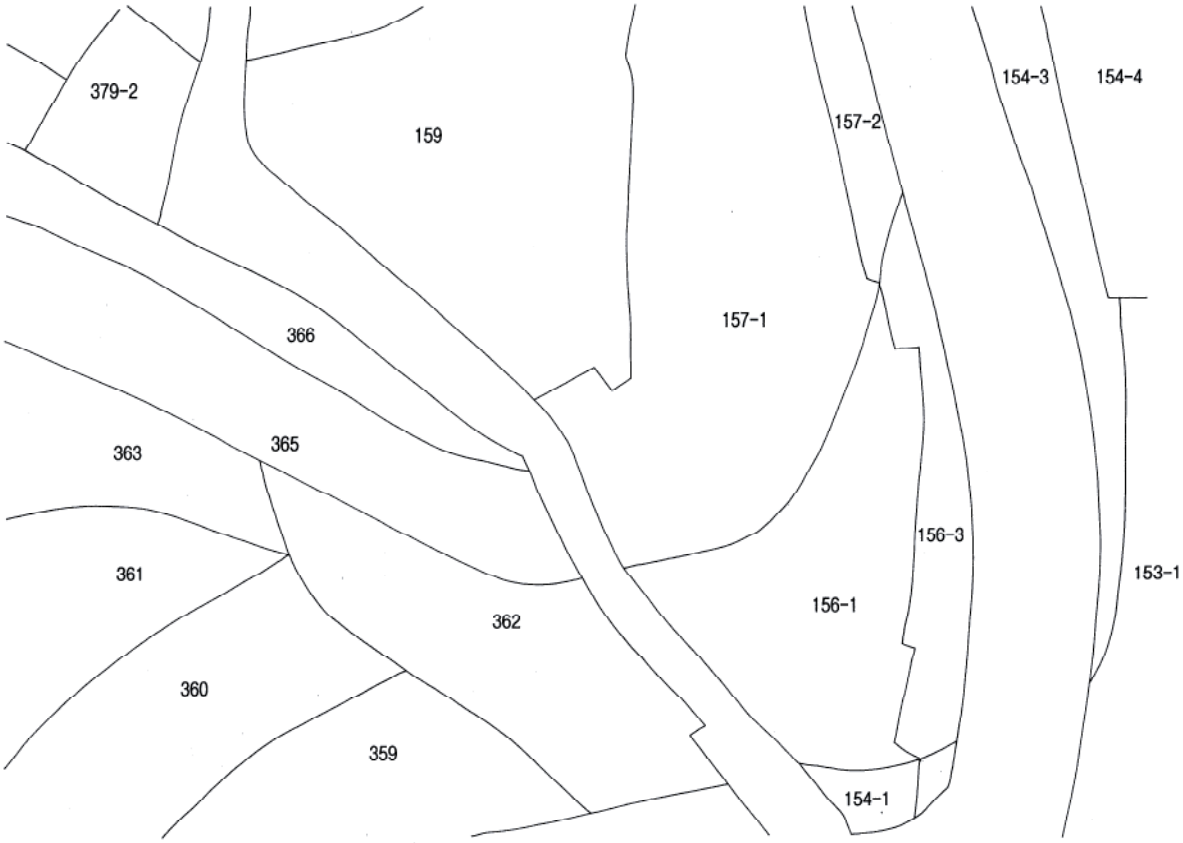
奈良県立橿原考古学研究所1982『飛鳥・磐余地域の後、終末期古墳と寺院跡』奈良県文化財調査報告書　第39集



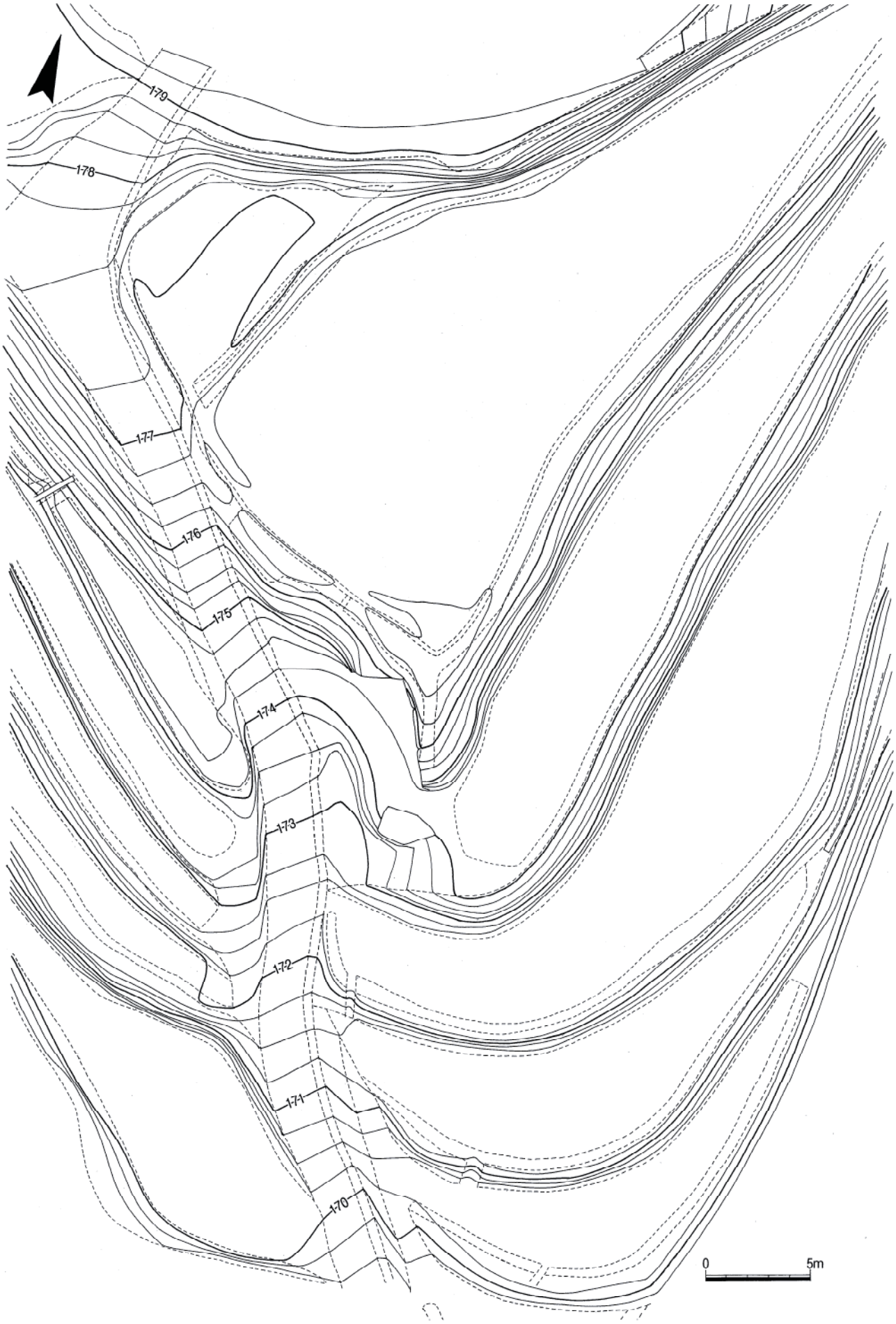
第３図　『大和国古墳墓取調書』（明治23年）



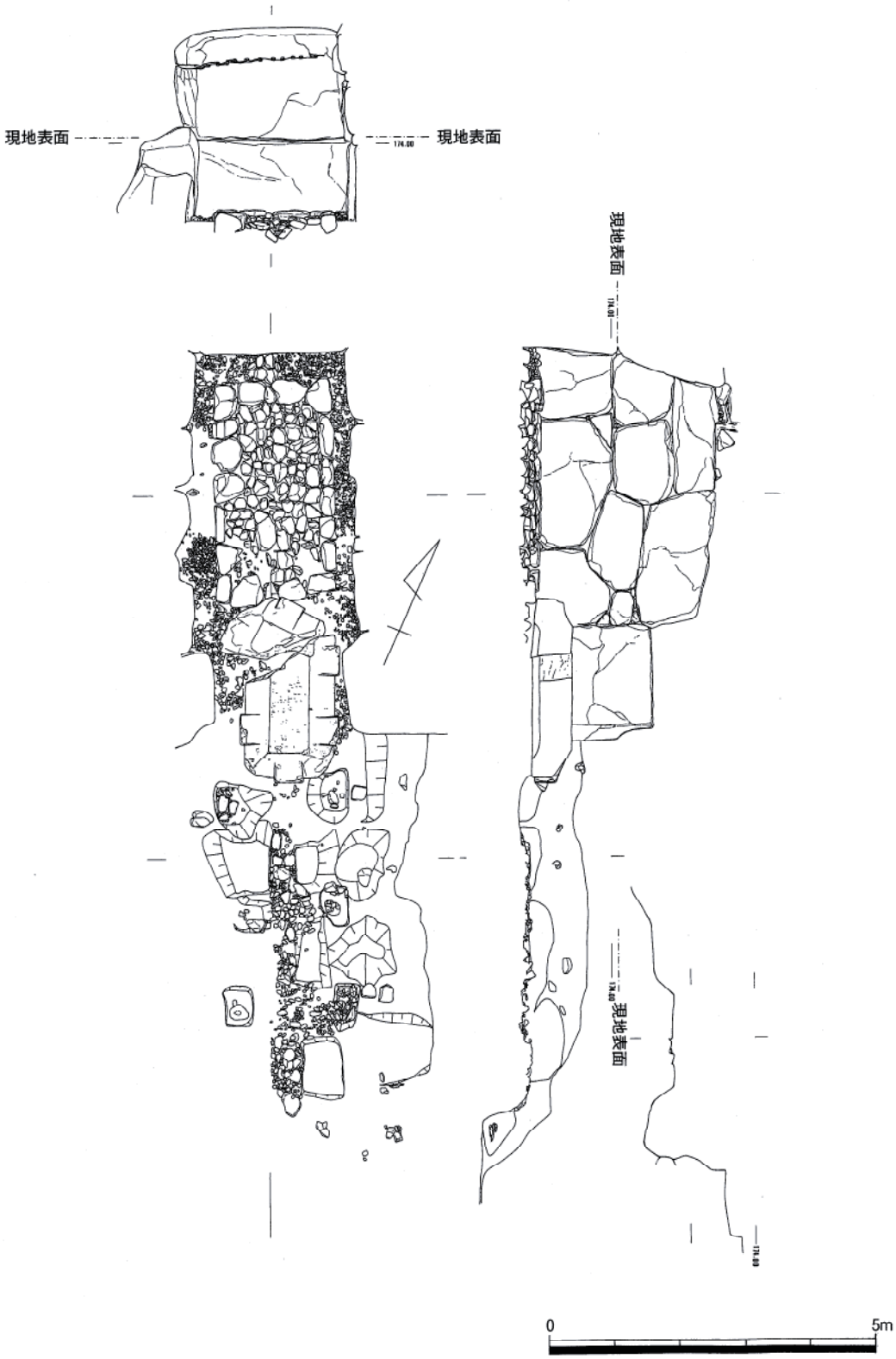
第４図　塚本古墳位置図



第５図　塚本古墳周辺地籍図



第６図　塚本古墳墳丘測量図（1：250）



第７図　塚本古墳石室実測図（1：100）

第 3 節　檜隈坂合陵・檜隈墓「兆域」石標について

1．はじめに

平成23年に村内全域の道標の調査のため踏査していた際、大字野口の集落内で道標とは異なる石標を発見した。その成果は昨年報告した通りである（西光ほか2014）。「兆域」と記された石標の存在が確認されたことにより、他の陵墓にも同様の石標が存在することが想定されたため、踏査を行った結果、檜隈坂合陵と檜隈墓において同様の石標を発見した。昨年報告した石標は陵墓より離れた場所で倒れた状態で発見したが、今回は陵墓に近接する箇所で埋め込まれて設置している状態で確認することができた。ここではこの石標について報告していく。

2．「兆域」石標について

【檜隈坂合陵】

檜隈坂合陵の拝所西側の階段下に設置されている。[1] 石標は花崗岩で作られた角柱型である。規模は現状で高さ27.5㎝、幅12.5㎝、厚さ12㎝を測る。四面中一面のみ丁寧に磨かれており、そこには「御陵兆域」の四文字が刻まれている。設置年月日や設置者等の文字は確認できない。

【檜隈墓】

檜隈墓の拝所北西の通路脇に設置されている。石標は花崗岩で作られた角柱型である。規模は現状で高さ22.3㎝、幅12.5㎝、厚さ12㎝を測る。四面中一面のみ丁寧に磨かれており、そこには「御墓兆域」の四文字が刻まれている。檜隈坂合陵の石標同様に設置年月日や設置者等の文字は確認できない。

3．まとめ

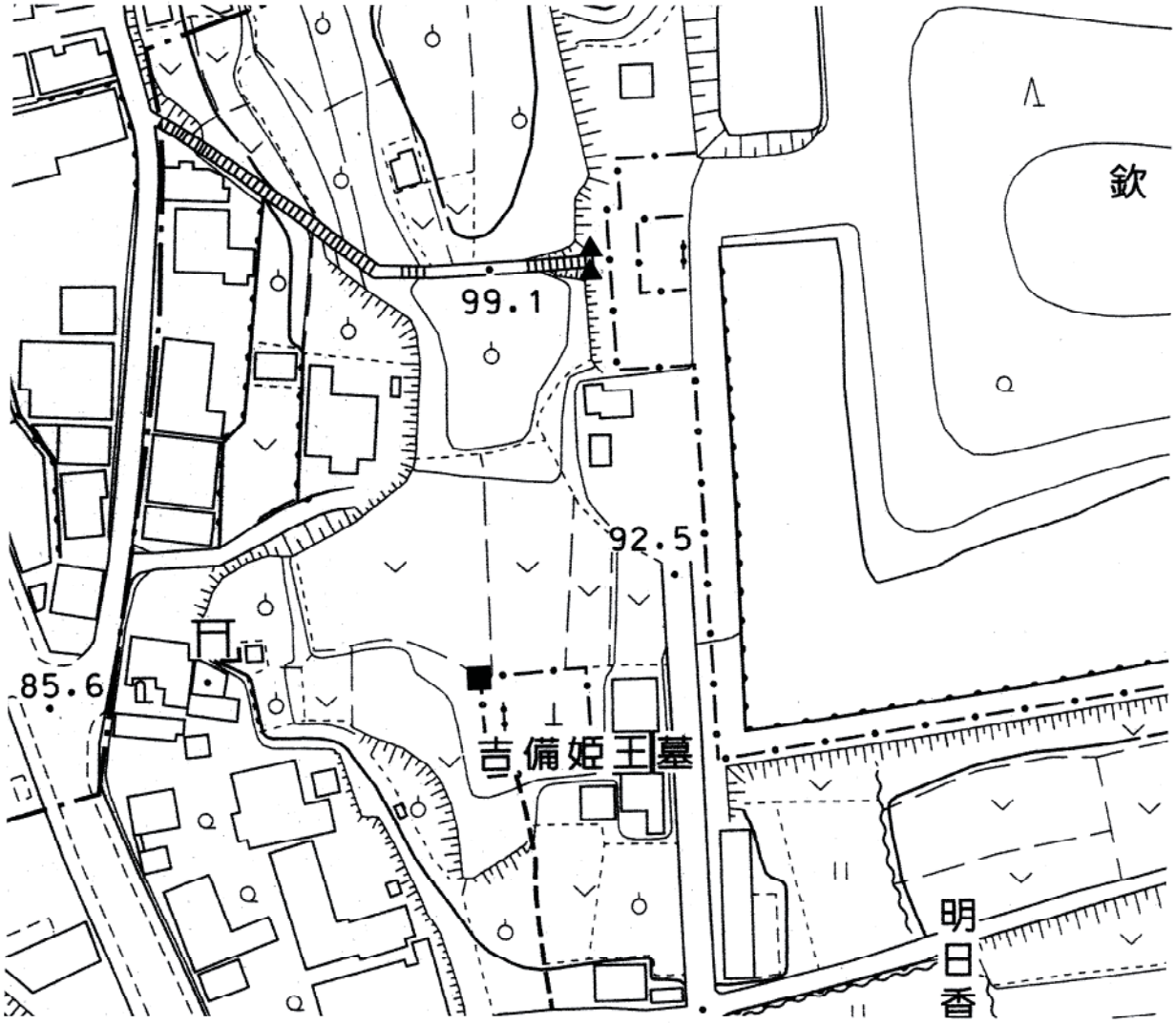
昨年報告した檜隈大内陵に引き続き、檜隈坂合陵と檜隈墓においても同様の石標の存在が明らかになった。檜隈大内陵の石標は陵墓から約200m離れた場所に位置しており、『延喜式』諸陵寮に記されている東西四町、南北四町の兆域にほぼ一致する箇所であった。しかし今回報告した檜隈坂合陵と檜隈墓の石標については、陵墓に近接する場所に設置されており、『延喜式』諸陵寮の兆域とは若干異なり、再度その設置背景を検討しなければならない。今後、周辺の陵墓を含めた踏査を実施し、古代における飛鳥の様相だけではなく、陵墓としてこれらの古墳が認識されてきた経緯等についても明らかにしていきたい。

【註】

1）檜隈坂合陵の参道に沿って同様の石標が埋没された状態で数基確認している。

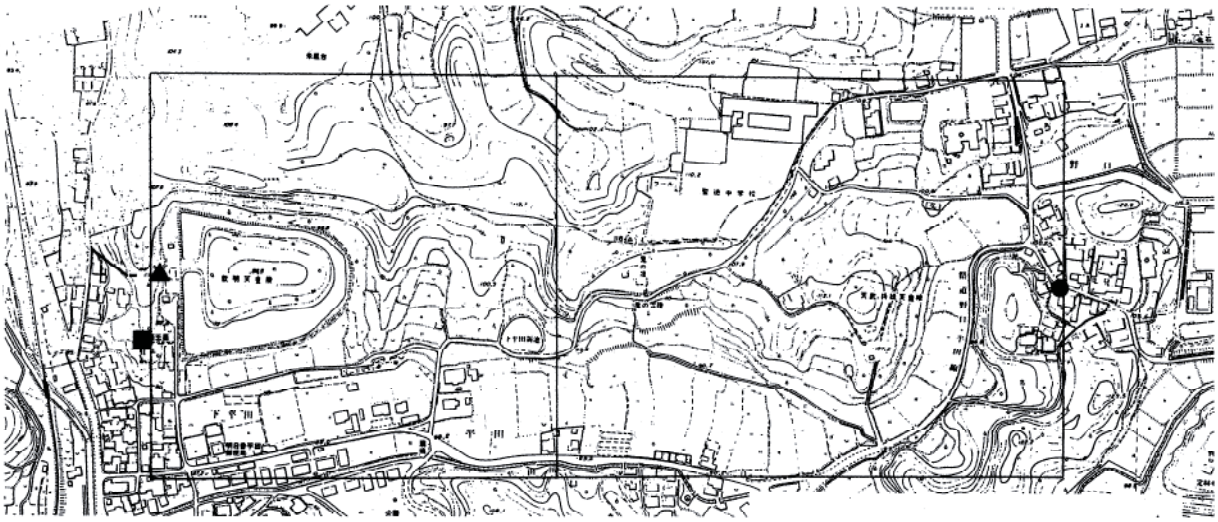
【引用・参考文献】

西光慎治・辰巳俊輔2014「王陵の地域史研究～飛鳥地域の後・終末期古墳測量調査報告Ⅷ～」
『明日香村文化財調査研究紀要』第13号　明日香村教育委員会



第８図　檜隈坂合陵兆域石標位置図

（▲：檜隈坂合陵「兆域」石標　■：檜隈墓「兆域」石標）



第９図　檜隈坂合陵・檜隈大内陵兆域推定図

（▲：檜隈坂合陵「兆域」石標　■：檜隈墓「兆域」石標　●：檜隈大内陵「兆域」石標）

第10図　檜隈墓石標実測図

第11図　檜隈坂合陵石標実測図

第 4 節　狐塚踏査報告

1．はじめに

明日香村大字越小字狐塚は、牽牛子塚古墳の東方に位置している。『高市郡古墳誌』には「現今は既に開墾されて畑地となって居るがその面積は約三畝歩許である。」と記されている。この場所は戦後に蜜柑が植樹されていたが近年では荒廃した土地となっている。地元の伝承によるとかつてこの丘陵を開墾している最中に大きな石が露出したらしく地元の青年団で動かそうと試みたが石材が大きかったため動かず断念したという。その後この石材は埋め戻されたとされている。また露出していた石材は自然石ではなく加工されていたとも言われている。詳細については定かではないが地元では小字狐塚で石が出たとの話は何人もの方々から伺った経緯もあり、今回この丘陵について踏査を行った。

2．踏査報告

小字狐塚は東西に伸びる低位丘陵から南東に舌状に張り出した丘陵上に位置している。丘陵では現在も畑地や蜜柑が植樹されており、棚田状を呈している。丘陵の頂部については草木が生い茂り荒れた状態で地表面を確認することができない状態となっている。小字の範囲は丘陵全体に及ぶため広範囲に踏査を実施したが石材が露出しているような場所や古墳状の隆起も現状では確認することができなかった。ただ西方に隣接する越塚御門古墳も地表面に古墳状隆起がないところでも終末期古墳が検出された経緯[1)]もあり、小字狐塚についても今後さらに周辺部も含め踏査を行い、検証していきたい。

3．表採遺物

今回の踏査では表採遺物等は確認できなかった。

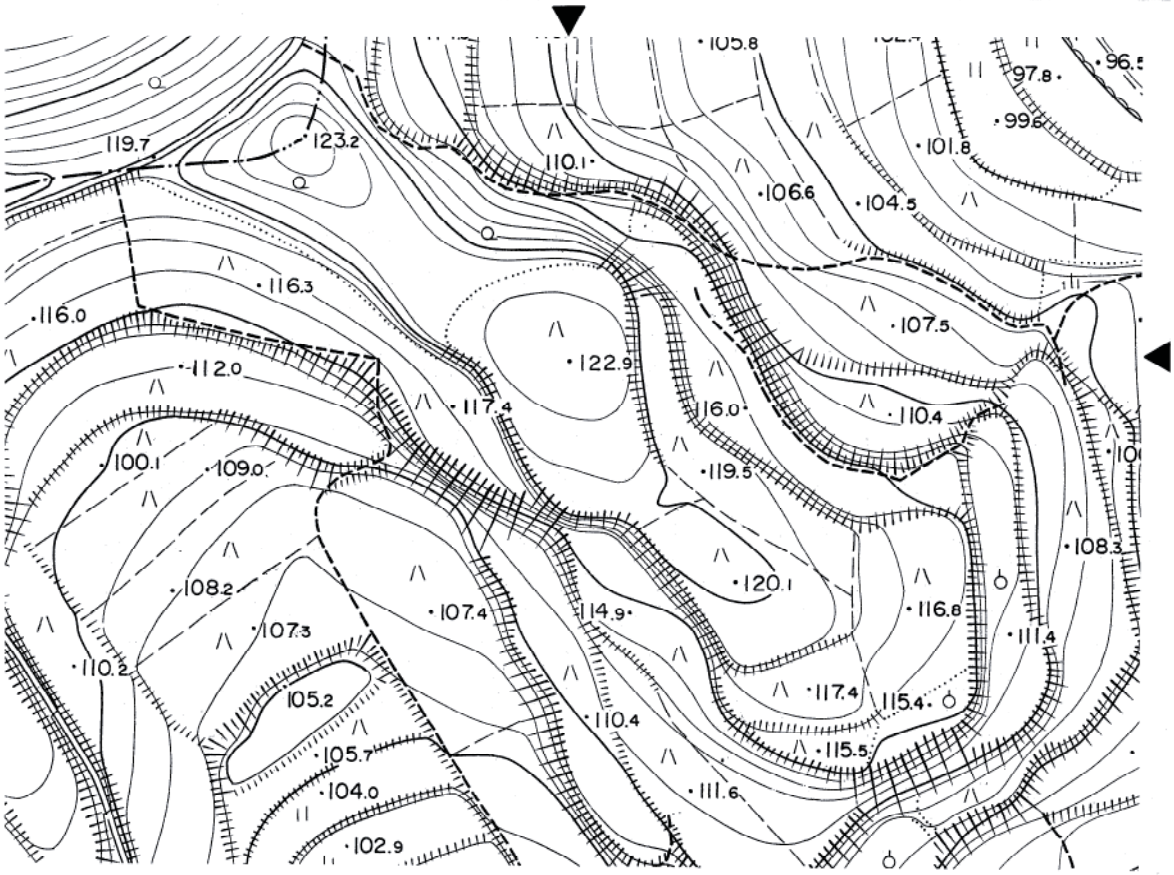
【註】

1）真弓テラノマエ古墳も墳丘が開墾や削平により失われ現地表面には痕跡がなかったが、磚積式横穴式石室を検出している（西光ほか2012）。

【引用・参考文献】

高市郡役所編1925『高市郡古墳誌』

西光慎治ほか2012「真弓テラノマエ古墳の研究」『明日香村文化財調査研究紀要』第11号　明日香村教育委員会



第12図　狐塚位置図

第13図　狐塚周辺地籍図

第 3 章　総括

王陵の地域史研究も今年で17年目を迎えた。これまで明日香村内をはじめ周辺地域の古墳の測量調査を通じて飛鳥地域の後・終末期古墳との比較研究を行ってきた。今回は昨年調査が実施された都塚古墳を考える上で重要な位置を占める塚本古墳について測量調査を実施した。石舞台古墳や都塚古墳、さらには細川谷古墳群と密接な関わりが想定され、現状を確認することにより、この地域の古墳について、再検証を行う有効な手法であると考える。また、陵墓の石標の類例が増加し、近世における陵墓管理の実態が徐々に明らかになりつつある。測量調査以外でも村内をくまなく踏査することにより、これまで遺跡の希薄であった地域で新たに遺跡を確認することができた事例も少なくない。今後も継続して飛鳥地域の後・終末期古墳を中心に測量調査や踏査を行い、飛鳥地域の地域史像解明に向けた基礎資料の充実を図っていきたいと考えている。

報 告 書 抄 録

ふりがな	おうりょうのちいきしけんきゅう
書名	王陵の地域史研究
副書名	飛鳥地域の後・終末期古墳測量調査報告Ⅸ
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編者名	西光慎治編
著者名	西光慎治、辰巳俊輔
編集機関	明日香村教育委員会事務局文化財課
所在地	〒634-0141 奈良県高市郡明日香村大字川原91-3 TEL 0744-54-5600 FAX 0744-54-5602
発行年月日	西暦2015（平成27）年3月27日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号				
塚本古墳	奈良県高市郡 明日香村大字稲 渕159他	29402	17-B-212	135° 49′ 9″	34° 27′ 40″	201412～201501	学術

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
塚本古墳	古墳	飛鳥時代	横穴式石室、家形石棺	土師器、須恵器	一辺39×40mの壇を有する方墳